

## 共通課題の達成による留学生と日本人学生の親密化の深まり

—多文化クラスにおける地域参加の事例から—

“Development of Friendly Personal Relationships between International and Japanese Students through Collaboration : A Case Study of Entry into a Community by Students with Multicultural Backgrounds”

阿部祐子（国際教養大学）

Yuko Abe (Akita International University)

### 要 旨

留学生と日本人学生の多文化クラスの実践の場を大学内から地域社会に移動させ、地方自治体職員と共にホスト側のメンバーとして、地域のイベントを成功させるという課題に取り組んだ。その結果、留学生と日本人学生の親密化だけでなく、学生と地域住民や地方自治体職員との間にも親密性が深まった。また、地域に対する知識や理解の深まり、地域住民や地域そのものへの愛着感、一般社会における責任感など通常の授業とは異なる学びが得られた。

In this study, personal relationships being built between international and Japanese students, as well as local community representatives, are examined through participation in local community festival activities, under the auspices of the local government. Specifically, it is the way in which students have had the opportunity to study in an unconventional setting which is being studied: acquiring knowledge of local cultural practices, making friendships through shared learning and understanding very different social norms.

【キーワード】 留学生，日本人学生，地域参加，親密化

### 1. はじめに

在日留学生の適応研究においては、ホスト社会との接触によって有効なサポートが得られ、接触の多さが日本人への好意的な認知につながるということが報告されている（田中 2000，高井 1994）。その一方で、留学生とホスト国の学生は親密になりにくいこと（横田 1991）や、ホスト国人からのサポートは道具的機能に偏る傾向（Bochner & Lin 1977）などの指摘もあり、双方の親密化をいかにして促進するかについての多様な実践が報告されている（坪井 1999，梶原 2003，など）。筆者も日本語教育や異文化教育の視点から、留学生と日本人の親密化を促進するための実践を多々行ってきた。本稿ではその中から、筆者の勤務校の授業科目「日本語の文化背景」において行った地域参加の実践について考察する。この科目は、留学生と日本人学生の双方の履修を認めており、学生が現在の日本社会を自らの視点で捉えることにより、日本文化や自文化に対する認識を再構築すること、またそのプロセスの中で受講者間の親密化が深まり、それが異文化理解へとつながることを目的としている。今回の実践研究では、従来の「共通課題の達成により、留学生と日本人学生の親密化は促進されるのではないか」という問いに加えて「授業の場をキャンパス外に移し地域

社会と関わることで、学生にはどのような学びがあるか」という新たな問いをたて、通常の授業とは異なる形態での実践を試みた。

## 2. 実践の概要

### 2-1. 背景

筆者の勤務校は秋田県にある小規模大学（1学年約150人）で、英語による授業を初めとする英語環境の重視や、正規生の1年間の海外留学の義務づけなどを特徴としている。留学生は約130人（09年9月現在）で、大半が提携大学（09年9月現在21カ国、91大学）からの1年間の交換留学生であり、欧米系とアジア系の学生の割合は、ほぼ半々となっている。ほとんどの学生はキャンパス内の宿泊施設で生活しているが、公共交通機関による外部から大学へのアクセスの頻度が低いいため、学生とキャンパス外の人々との接触は限定されたものとなっている。留学生にとってこのような環境下での生活は、ときに日本語力の伸び悩みや留学そのものへの不満へとつながることもある。日本人学生は、語学や国際社会の動向に関心が強く、留学生とも親密な交流を望む者が多いが、特に留学前にはそのきっかけがつかめずにいる学生も少なくない。

本大学では、日本語の授業や卒業前のゼミなどを除いたほぼ全ての開講科目を、留学生も日本人学生も履修できることになっているが、本稿で取りあげる授業科目「日本語の文化背景」は、唯一日本人学生と留学生が共に日本語で履修できるものである。留学生の日本語レベルを揃えるため、春学期は日本語のクラスが中級の留学生、秋学期は上級の留学生を対象にしている。授業では、現在の日本社会の中から教育、職業、恋愛、宗教、地域社会などのテーマについての話し合い、インタビュー、現場へのフィールドトリップなどを行っている。フィールドトリップは、これまで学校訪問や公共機関の職場訪問などを中心に行っていたが、2007年からはそれに加えて、国際観光推進に尽力する地方自治体と留学生の存在を互恵的につなげることを目的に、Y市と連携した1日のフィールドトリップを始めている。

### 2-2. 実践の概要

本稿で取り扱う実践は、Y市の雪祭りに焦点をあてて、2009年冬季プログラム（注1）の「日本語の文化背景」の授業として行われたものである。この科目は前述のとおり、通常は、複数のテーマについて15週間かけて行われているが、今回は冬季プログラムとしての開講であったため、テーマを地域の雪祭りへの参加に絞りプロジェクトを中心とした、通常とは異なる形式の授業とした。

留学生に対する地域の催しへの招待は多いが、その大半はその場限りの一時的なもので、留学生は単なるお客様でしかない。この状況を打破すべく、2007年からY市と連携して行ってきたフィールドトリップでは、留学生の視点で地域の現状を観察し提言をするという試みを行ってきた。今回はそれをさらに進めて、Y市主催のイベントを準備段階から手伝い、当日は責任者の下で、ある程度責任を持った業務を行うという内容にした。これにより、イベントを成功させたいという共通目標を得て相互理解が深まること、特に留学生にとっては、学外での日本人との接触を通して地域に対する新たな視座を持つことを目的とした。参加者は、留学生15名（欧米出身者6人、アジア出身者9人、日本語レベルは中級

レベル10人、上級レベル5人)と日本人学生7名(全員2年次),であった。授業担当者として筆者は、Y市に対しては、観光物産課との交渉、および、学生の作業内容や当日のスケジュールについての打ち合わせなどを行った。学生に対しては、フィールドトリップ前の授業において、Y市やかまくら祭りなどに関する資料を配布して情報を与えたり、日本語中級レベル程度の読解教材を日本人との混成のグループで読む活動などを行ったりした。当日は、学生の活動への関与は最小限にとどめ、学生とY市の職員や地域住民とのやり取りを外から見守るような形での関わり方をした。

授業の日程と内容は表1に示したとおりであるが、このうち軸となる活動は、2月6日～7日(1泊2日)と2月15日の2回のフィールドトリップ、および、最終プロジェクトである。以下、それらについて説明する。

#### Y市における雪遊びイベントの準備と参加(09年2月6日・7日)

旧正月に行われる伝統的祭り(かまくら)のプレイベントとして、Y市観光物産課主催の地域住民向け雪遊びイベントが開催された。学生はその準備のため前日から会場に赴き、「雪の滑り台作り」を担当した。同じ会場では、かまくらづくりや雪像づくりなども行われていた。その晩は、Y市職員を中心としたスタッフと翌日の打ち合わせを兼ねた懇親会が行われた後、最寄のホテルに宿泊した。翌日は、それぞれの担当の持ち場に分かれて会場の準備とイベントでのY市職員の補佐をし、イベント終了後の会場撤去作業までを手伝った。フィールドトリップの後には、具体的に自分がどのようなことをしたか、また今回のフィールドトリップを通して、留学生または日本人学生との関係が変容したかどうか、全体的にどのようなことを感じたかについて、レポートにまとめる課題を出した。

#### Y市の伝統的祭り(かまくら)における学内参加希望者のガイドツアー(09年2月15日)

学生には予めこの祭りに関して調査し、友人に説明ができるようにするという課題が出されていた。また2月6日のイベントの際、Y市職員より祭りの概要、見どころ、見学ルートについて説明を受け、共に下見をした。それをもとにグループ(2-3人)で当日の計画を立て、受講生がガイド役となり大学からの希望者を案内することが当日の課題である。参加希望者は35人ほどで、約2時間のグループ別(6-7人)自由行動をとった。終了後、大学からの参加者に対して簡単な質問紙調査を行った。フィールドトリップの後には、このガイドツアー全体についての感想と、自分の役割を果たせたかどうか、今後の課題などについて、レポートにまとめる課題を出した。

#### 最終プロジェクト

留学生と日本人の混成グループ(3-4人)で、Y市の人々を対象に調査を行い、最終授業で発表することを課題とした。テーマは各グループで自由に設定させた。最終レポートでは、プロジェクトの最初から最後までを振り返り、自分とメンバーとの関係性や自分自身の考えや行動が、どのようなプロセスを経てどのように変化したかについてまとめるように指示した。

表1 主な授業内容

日にち	授業内容
1月13日, 20日	コース紹介, および, お互いを知るためのアクティビティ
1月27日, 2月3日	最終プロジェクトのテーマ決定, および, 話し合い

2月6日（泊），7日	Y市へのフィールドトリップ（1）雪遊びイベントの準備と参加 [課題：レポート①]
2月10日	Y市の伝統的祭り（かまくら）ガイドツアー準備
2月15日	Y市へのフィールドトリップ（2）Y市の伝統的祭り（かまくら） ガイドツアー [課題：レポート②]
2月17日	グループ発表準備
2月24日	グループ発表，振り返り [課題：レポート③]

### 3. 実践の考察

上記3回のレポートに記述された内容について、今回の実践研究のテーマである「親密化の促進」と「地域社会との関わりによって得られた学び」の2点をもとに考察する。

#### 3-1. 親密度の深まり

##### 3-1-1. 留学生と日本人学生の親密化の促進

留学生と日本人学生間の親密化の促進については、参加者全員が様々な形で言及していた。特に普段の授業や生活の中からは得られない深い交流が、一泊二日のフィールドトリップで共に行動することや、協働プロジェクトを行うことによって実現している様子が見えがえる。以下、レポートから抜粋する（注2）。

「日本の大学で勉強していても、日本人との交流は非常に少ないと思います。このコースの発表やディスカッションから、留学生と日本人との関係や交流があって、お互いに文化の理解や交流にもとても役に立つと思いました。」〈留学生（以下留と訳す）A〉

「授業を通して、いろんな留学生と友達になることができ、すごく嬉しかったです。この授業をとる前は、全然留学生と知り合う機会がなくて、（…）英語で話しかけなくてはいけないというのが、ちょっとプレッシャーになっていて、自分から留学生に話かけようとしていませんでした。（…）すぐにいろんな留学生と友達になることができました。（…）もっと留学生と関わっていこうと思ういい機会になりました。」〈日本人学生（以下日と訳す）A〉

##### 3-1-2. 学生と地方自治体職員・地域住民の親密化の促進

特筆すべきは、今回の実践において学生間だけでなく、学生とY市職員、地元住民にまで交流が広がり、学生が今まで接触のなかったキャンパス外の人々に対して親近感を抱いたことである。凝縮された時間の共有とイベントの成功や共通目標への達成動機が親密度を深めたと考えられる。多くの記述の中から、代表されるものを以下に示す。

「一番楽しかったのは観光課の人と一緒に晩ご飯を食べることだと思う。私は日本人の社会人と話す経験があまりないが、あの夜に同じテーブルのスタッフさんと一緒に喋ったりお酒を飲んだりしてすごく楽しかった。」〈留B〉

「祭りを準備する過程を見た点、祭りを準備する人々の気持ちを一緒に分けることができた（…）全部良い経験でした。」〈留C〉

「まつりに来ていた英語を勉強しているという年配の方が留学生と楽しそうに話しているのを見て、このような場がもっと多くあれば良いと感じました。」<日B>

「祭は最高の出会い、ふれあいの場であるということでした。とくにこの雪まつりでは、学生と地域の方々、大人と子供、日本人と外国人、と普段あまり関わることのない人達同士のふれあいを多くみることができました。」<日C>

「すべり台を作るときに、Y市の方が「～して下さい」ではなく「どうしたら良いと思いますか」と言ってくくださったのが、とても嬉しかったです。私たちも自分の意見を言えたことで、“手伝う”というよりむしろ“協力”して一緒にイベントを作った、と思うことができました。Y市の方が私たちと同じ目線で接してくくださったことが嬉しかったです。」<日B>

### 3-1-3. コミュニケーションによる親密化の促進

普段は、お互いにきちんとしたコミュニケーションをとることがなかった留学生、日本人学生、地域職員、地域住民が、お互いの立場に配慮しながらコミュニケーションをとろうと努めた。留学生は、上手に話せなくてもサポートしてくれる日本人の友人がそばにいてくれたり、周りの人々が一生懸命耳を傾けてくれたりすることで、自分の話を理解しようとしてくれる人がいることから、安心感や信頼感を得ている。

「日本語でちゃんと説明できませんが、相手はちゃんと聞いてくれました。」<留A>

「私とWさんが時々言葉の表現が分かりませんでした。Yさんはやさしい言葉で説明してくれて、留学生の私たちを日本語の部分でたくさん助けてくれたと思います。」<留D>

日本人学生は、相手のわかる言葉で言い換えたり、ゆっくり話したりすることにより母語話者として外国人とどのようにコミュニケーションをとればよいかについての気づきが見られる。また、留学生の日本語を学ぶ姿勢から刺激を受け、自分自身への振り返りをしていること、コミュニケーション方法の獲得により、留学生と共にプロジェクトを行うことへの不安や戸惑いが軽減されたことなどが以下の記述からわかる。

「なぜ留学生は日本語を話すのが恥ずかしくないのだろう(…)。いろんな日本語レベルの留学生がいたのに、みんなどんどん日本語を話していて、間違えばお互いに注意し合って直していることが本当にすごいと思いました。」<日B>

「最初にグループ発表があったとき、私は少し緊張していました。留学生と一緒に準備するプレゼンテーションは初めてだったので、仲良くなれるかとか協力し合えるだろうかと感じていました。しかし(…)私たち3人はずっと日本語を使って会話を楽しみ、プロジェクトの準備を進めていきました。」<日C>

## 3-2. 地域社会との関わりによって得られた学び

### 3-2-1. 地域に対する知識や理解の深まり

留学生にとっても日本人学生にとっても秋田県という場所は大学の所在地であるというだけで、地域に対する関心は薄く知識や理解もあまりない。しかし、実際に地域の祭りや行事について学び、それを第三者に伝えることにより、地域そのものや伝統行事に対する知識や理解が深まっているのがわかる。また、最終プロジェクトのインタビュー調査で

Y市の人々と話をする事により、地域の人々の考え方や生活に直接触れることができたようだ。

「かまくらについて友だちに説明とかガイドしてあげて本当にうれしかったです。私はかまくらの歴史やかまくらを作る方、私の経験などを友だちに話してあげました。」<留E>

「Y市の地域の方々との交流により、秋田の文化や伝統を直接知ることができました。かまくら1つを作るにしても、大勢のかまくら職人がたずさわり何日間にも及んで作業するという事を、パンフレットなどを通して知識として知るのではなく、実際に作業している姿を見て、実践として知ることができたことにとっても意味があると思います。」<日C>

### 3-2-2. 地域や地域住民に対する愛着感の深まり

これまでキャンパス外へ出る機会が少なく、地域との接触はほとんどなかった学生たちが、祭りのホスト役として共に作業をした地域ボランティアの人々や客との対話を通して、地域に対する親近感や愛着感が深まっている様子が多数記述されていた。日本人学生には、自分の故郷に対する新たな郷土愛の意識が芽生えているのうかがえる。

「(…一緒に仕事をした)おばあさんにいろいろなことを教えてもらいました。昔の人が秋田の冬をどのように過ごしていたのか、冬の食べ物の始まり、方言などいろいろな話をしてくれました。」<留F>

「おじさんたちは私が頑張って手伝いをしている姿を見て、最後にプレゼントとしてくれたのです。(…)とても感動でした。」<留G>

「もし機会があったら、私は絶対また来年戻って来ると思います。」<留G>

「まるで自分の家のような感じが生まれてきて、心が温かかった。」<留H>

「本当にかまくらまつりがとても気に入って、秋田ってすごいなとちょっと秋田を見直したというか、秋田の他のまつりも(…)見たいなと思い、今回かまくらまつりを見たことで秋田に対して今まで以上に興味を持つことができました。」<日A>

「雪祭りを手伝うことによってY市の活性化のために少しでも貢献出来たことに私自身、満足している。秋田県は全国的にも過疎化が進んでいて(…)'自分の郷土が好きだ'と感じる人間を増やしていくことが大切である。」<日D>

「秋田にはかまくら祭りのような魅力的な伝統行事や文化がたくさんありますが、私はそのほとんどを体験したことがなく、もっと自分の育った県について知り、体験して、他の人々に教えたいと思うようになりました。」<日E>

### 3-2-3. 目標達成感と満足感

目標達成感とそれに伴う喜び、誇り、などが見出された。目標達成までのプロセスでは、楽しんでいる様子と同時に、不安や恥ずかしさなども感じられるが、最終的にタスクを成し遂げた時点では大きな達成感や満足感を感じ、それが他者からの感謝の意により強化されている。

「皆団結して同じ目標を目指し、共に働く感じは楽しかった。(…)滑り台の完成を誇りにしている。」<留I>

「一日中子供達のためのイベントでボランティアとして働いた。子供達は私達が頑張って作ったそりスロープで遊んでおり、彼らの親に『ありがとうございます』と言われ、すごく嬉しかった。」<留J>

「私が（道を）まちがったのに、（…）案内して上げた友達が『かまくらまつりは面白かった。ありがとう』と言ってくれたので、嬉しかったです。」<留K>

「自分自身の案内役、ホスト役としての役割については、十分役割を果たせたと思います。」<日A>

### 3-2-4. 仕事に対する責任感や緊張感

満足感と同時に、一般市民を相手に仕事をする事への責任感や緊張感もみられた。責任の重さに対する不安や、自分の至らなかった点への反省も多く言及されていた。特に「かまくらガイドツアー」に関しては、準備時間の不足などを指摘する意見が多かったが、単なる否定的な感情や不満というより、改善への提案という前向きな形で表現されていた。

「（…）私は前雪滑りを遊んだことがありませんでしたから、遊び方はどうしたら安全だかどうか全然分からなかったし、どうしたら子供達の安全が確かめるかという概念は全然知らなかったから、子供達に楽しんで自分が好きなやり方はさせられなかったです。」<留A>

「初めて案内する役を担当して、とても緊張しました。（…）日本語も上手じゃないし、Y市のこともあまり知らなかったの、思い切ってしっかり案内することしかできませんでした。」<留L>

「最初は自分達があそこまできちんとイベントに関わると思ってなかったの、驚きました」<日B>

### 3-2-5. 日本社会に対する認識の変容（留学生）

留学生がこれまで持っていた日本人や日本社会に対する認識が、キャンパス外の人々と親交を深めることによって修正される様子がうかがえる。特に酒を飲みながらの親睦会により、非公式の場での社会人と接しての驚きや発見について言及した留学生が2人いた。酒の席におけるコミュニケーションが日常のものとは異なる傾向は、地方社会にはまだ色濃く残っている。彼らはそれを目の当たりにして、日本人への認識が変わったと考えることができる。

「日本人に関するステレオタイプは規則を守らなければならない、とても真面目な民族だが、観光課の人は違う。みんなは素直で、留学生と優しく話した。（…）スタッフさんはお互いに冗談を言って、それを見ると、私はびっくりした。フィールトリップした後、日本人に関するステレオタイプはちょっと変わった。」<留B>

「日本人がお酒を飲んだら、お互いに心の壁を破いて、本音を話してくれると思う。」<留I>

### 3-2-6. 日本語力の向上と自信（留学生）

留学生からは、キャンパス外の人々と触れることにより、日本語力が高まり自信がついたという報告が多かった。前述のように、キャンパス内では英語でのコミュニケーション

が可能であるため留学生が日本語で話し続ける機会が少なく、自分の本当の日本語力に自信が持てない学生も多かった。今回、日本語だけでコミュニケーションを長時間続けることによって日本語力が向上したと感じたり、また自分の日本語が一般の日本人に充分理解してもらえるものだという自信を得たりした留学生が多くみられた。留学生のほぼ全員が、日本語力の向上について何らかの形で言及していたが、同時に改めて自分の語学力の弱点認識し、今後のスキルアップに役立てようという記述もあった。

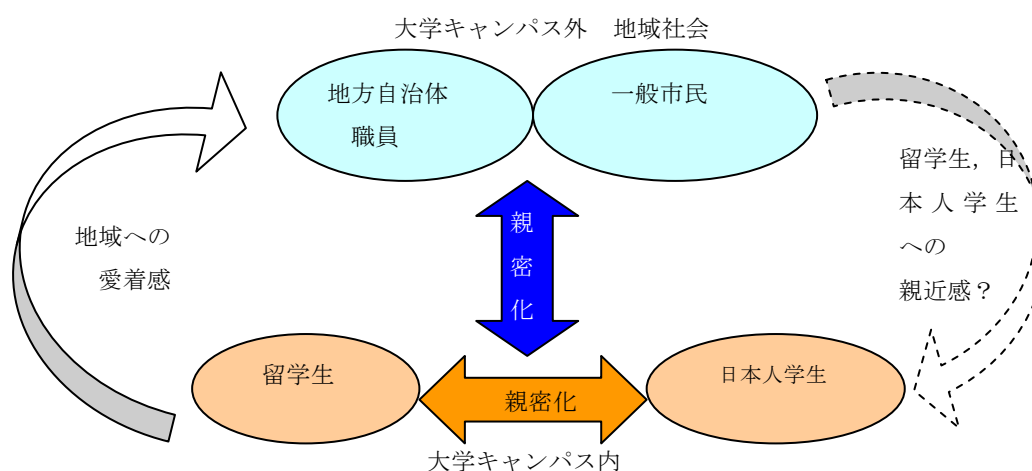
「(学内の友達)は) 英語も話せるし、本当の日本人とは少しちがう。でもそれ以外の全然英語ができない人と、日本人みたいな人と仲良くして、日本語で話したのはとてもいい経験でした。」<留K>

「自分の日本語で述べる能力はとても不足していると深く感じました。普通の日常生活についての話はあまり問題ないと思いますが、もう少し深い話題に行くと、言いたいことをちゃんと伝えないという時があることを感じました。」<留A>

#### 4. まとめと今後の課題

本稿では、キャンパス外社会との接触が困難な地方大学の学生を、地域と結びつけ協働で課題達成を行うことによる効果を検証した。その結果、留学生と日本人学生の親密度だけでなく地方自治体職員や地域住民との親密性も促進されること、また、学生の地域や地域住民に対する愛着感や理解が深まり、通常行われる教室内での授業とは異なる学びが得られることが明らかとなった(図1参照)。今後は、このような意識は持続されるのか、また、このつながりを強化していくためには、どうすればいいのかを考える必要がある。それに加えて、今回は学生を対象とした調査であったが、自治体職員や地域住民の学生に対する意識についても調査が必要である。筆者の観察や現在進行中の面接調査では、自治体職員や地域住民の留学生を含めた学生に対する親近感は深まっているようだが、今後のさらなる調査が必要である。学生と地域社会の双方からの親密化が深まることを見出されることにより初めて、互恵的な支援活動が展開され、留学生と地域をつなぐ多文化共生社会への第一歩が踏み出されることになると思う。

図1 共通課題達成によって得られた地域社会と学生の関係





## 注

- (1) 春学期(4月～7月), 秋学期(9月～12月)の授業は15週間行われるが, 冬(1月～3月)には, 7.5週間の期間に2倍の時間数が凝縮して行われる。そのため冬季プログラムと呼ばれ, 秋学期の一環として考えられている。学生の履修はオプションとなっているが, 留学生はほとんど全員が履修している。
- (2) 抜粋はすべて原文のままとする。

## 参考文献

- (1) 梶原綾乃(2003)「留学生と日本人学生との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」『日本語教育』117号, 93-102
- (2) 高井次郎(1994)「日本人との交流と在日留学生の異文化適応」『異文化間教育』8, 異文化間教育学会 アカデミア出版会, 106-117
- (3) 田中共子(2000)『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ書店
- (4) 坪井健(1999)「留学生と日本人学生の交流教育」『異文化間教育』13, 異文化間教育学会 アカデミア出版会, 60-74
- (5) 横田雅弘(1991)「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』5, 異文化間教育学会 アカデミア出版会, 32-48
- (6) Bochner, S., B.M., & Lin, A. (1977) "Friendship patterns of overseas students: A functional model" *International Journal of Psychology*, 12, 277-294